



藤岡市立美土里小学校 4年 宮原 彩乃

## 差別のない『自由への入り口』

人種が差別されていたことは、私も知っていました。でもこの本を読むまで、こんなにひどい差別がされていたなんて知りませんでした。

一九五〇年代、はだの色がちがうというだけで、ホテルやレストラン、そして公園などでも人種を差別する看板があり、自由に入ったり、白人といっしょに使ったりする事が出来ませんでした。

ある日、パトリシアは世界中のどこよりも大好きな『あの場所』に一人で行くことがゆるされました。でもその途中で、たくさんの人種差別にあいます。バスの中では、『黒人指定席』と書かれた後ろの席にしか乗ることができません。公園のベンチには『白人せん用』と書かれていてすわる事ができません。それでも、パトリシアは何もなかったふりをして、公園を出ていきます。私なら、泣きながらすぐ家に帰ってしまうかもしれません。何もなかったようにできるパトリシアは、強いと思いました。まちがえて入ってしまったホテルでは、たくさんの人の前で「はだの黒い人間は立ち入りきん止だ」と追い出されてしまいます。それでもパトリシアは決して人前で泣くことはしませんでした。白人の前で泣くのがくやしかったのだと思います。パトリシアは、『あの場所』に行くのをあきらめそうになりますが、いろいろな人に助言をもらい、最後まであきらめずにたどり着くことが出来ました。白人に差別されていることで仲間できさえあう気持ち強いのだと思いました。

パトリシアのおばあちゃんは、そこを『自由への入り口』とよんでいました。そこの正面の入り口にある大理石には、『公共図書館：だれでも自由に入ることができます』ときざまれていました。

一九五〇年代後半、全ての図書館は人種に関係なくだれでも使えるようになったそうです。パトリシアにとって図書館は、どんなに辛い思いをしても行きたい場所だったのだと思います。白人から差別される事のない『とくべつな場所』だったのです。

私たちは、こんなひどい差別は受けられないけれど、パトリシアたちは、どうしてこんなひどい差別を受けなくてはいけなかったのだらうと思います。とても悲しい事です。こういう差別があるから、今でもぼうどうや戦争が起こるのだと思います。

この本を読んで、同じ人間なのだから差別やいじめをなくし、おたがいの人けんを守り世の中が平和でみんなが幸せにくらしていけたらいいなと思いました。